

あとがき

日本経済の好景気と歩調を合わせるように日本酪農の景気も、かつてなかったほどの潤いをみせている。日本酪農の好景気の要因は牛乳消費の堅調さを背景とした生産調整の緩和と乳牛個体の高値に支えられたものである。さらに、近年の円高に伴う飼料価格の低下にあるといえよう。

しかし、これらの好景気を支えた要因が、今後、どこまで続くかは不透明である。すでに牛乳消費の伸びを上回る生産の伸びに、再び生産調整の声が聞かれるようになったし、91年の牛肉自由化により、乳牛个体価格の低下は必至である。また、円高がどこまで続くか、飼料価格の安定的推移についても長期にわたる保障はできない。本来、土地利用型農業であるはずの酪農が、飼料基盤を海外に依存すればするほど、不安定性を増大させることになる。従って、安定した日本酪農を確立するには、いかに、日本の国土に立脚した土地利用型の酪農をつくりあげるかにある。すなわち、酪農の原点である、土-草-牛の正常な循環メカニズムを確立することにある。

しかし、それは単に懐古主義的なものではなく、国際化をふまえた上で確立でなければならない。そういった観点から今回のシンポジウムが開催され、それにふさわしい農家の方々に御登場いただいた。熱心な報告と討論が行われ、それがさめぬうちに取りまとめようと務めたが、編集者の多忙と不可避的な事情により発刊が遅れたことを、おわびする次第である。なお今回のシンポジウム開催に当たっては、資料作成、写真撮影は荒木和秋氏にお願いした。

(1990 2. 24)

(編集担当 酪農大助教授 篠原 功)